

イネ縞葉枯病に対する新規系統育苗箱施用剤の防除効果

農業総合センター農業研究所

【研究の背景】

イネ縞葉枯病（図1）はヒメトビウンカ（図2）が媒介するウイルス病で、県西地域を中心に発生が多い状況が続いています。発病してから治療する方法はなく、被害を減らすためには、イネがウイルスに感染しないようヒメトビウンカを防除することが重要です。

このため、イネ縞葉枯病の多発地域においては、殺虫剤の播種～田植時育苗箱施用が有効ですが、薬剤の選択肢が限られていることから、ヒメトビウンカの薬剤に対する感受性の低下が懸念されています。



図1 イネ縞葉枯病の症状（穂の出すくみ）



図2 ウイルスを媒介するヒメトビウンカ

【研究内容】

平成30年および令和元年に新たに登録された新規系統の育苗箱施用剤であるリディア箱粒剤（フルピリミン粒剤）およびフェルテラゼクサロン箱粒剤（トリフルメゾピリムを含む粒剤）について、本病に対する防除効果を明らかにしました。

【研究成果】

リディア箱粒剤およびフェルテラゼクサロン箱粒剤は、ヒメトビウンカ幼虫の発生を抑え、イネ縞葉枯病の発病抑制効果が高い（図3）ことがわかりました。無処理と比較して農薬費が増加しますが、防除効果が高く減収を抑えられることから収益が増加します（表1）。

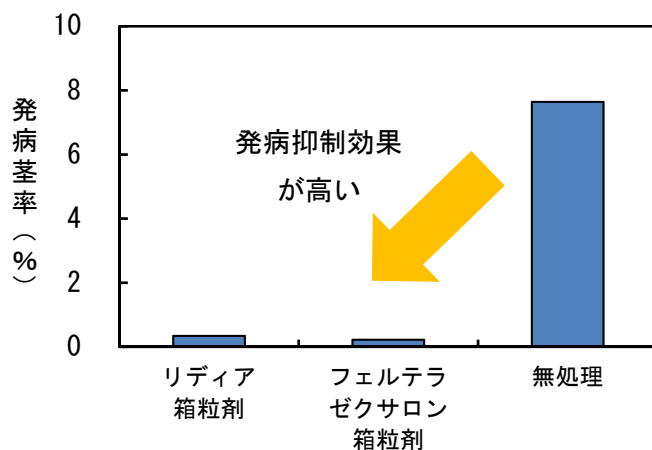


図3 新規系統育苗箱施用剤によるイネ縞葉枯病防除効果

表1 新規系統育苗箱施用剤による収益の試算

薬剤名	推定収量 (kg/10a)	粗収益 (円/10a)	農薬費 (円/10a)	粗収益-農薬費 (円/10a)
リディア箱粒剤	503	130,336	2,490	127,846
フェルテラゼクサロン箱粒剤	504	130,595	2,639	127,956
無処理	467	121,007	0	121,007

注) 推定収量: 発病率=減収率とみなし、令和2年産水稲の10a当たり平均収量の茨城県の数値 505kg/10a（農林水産省資料より）を用いて推定した。

【将来の展望】

イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカの薬剤抵抗性発達が懸念されていますが、本研究結果により効果の高い薬剤での防除が可能となり、イネ縞葉枯病の発生を抑えることで水田経営の経営安定化に寄与します。